

視点1

子どもの葛藤、私の葛藤、保育の中の葛藤

川崎徳子

(大学教員)

三歳児のOちゃんは、担任の先生も少し気に掛けている男の子です。入園して二か月、幼稚園もずいぶんと自分の生活の場になってきているようで、他の三歳児よりもっと自由に?! 自分の行きたい場所へ好きなように動くという毎日が続いているようでした。この日も、時々保育に参加する私が三歳児の保育室の辺りにいると、ちらりと横目で見ながらも遊戯室の方へすたすたと向かっていきましました。私も何となくOちゃんについて行くと、Oちゃんは、何をするということもなく、遊んでいる年長児の横を過ぎ、遊戯室を通り抜

けて園舎の裏側の廊下を通って、ぐるりと自分の保育室の横まで戻ってきました。

その廊下の空間で、中型のソフト積み木を並べて遊び始めていた三歳児がいました。その姿が目に入った途端Oちゃんは、積み木を持っていたF君がけてまっしぐらに、体ごと向かっていきました。Oちゃんのちよつと乱暴な様子にF君もびっくりしていたので、私は慌ててOちゃんを後ろから抱きかかえて、とりあえずF君に触れないように止めました。それでもまだOちゃんはF君に向かって手を振り上げていたので、「急に行くとびっくりす

川崎徳子(かわさきとくこ)
山口大学教育学部。保育学、乳幼児心理。著書:『幼稚園で育つ』(共著、ミネルヴァ書房)、『エピソード教育臨床―生きづらさを描く質的研究』(共著、創元社)。

るよ」と声を掛けました。が、Oちゃんは、自分でもどうしようもないようで、抱えられながらも涙目で、さらに前に前に体を動かそうとしました。そのときは私も必死でしたが、Oちゃんが「電車、電車」と小さな声でつぶやいているのに気が付きました。びっくりしていたF君もその頃には持っていた積み木を下に置いて、じーっとOちゃんを見ていました。私は、もがいているOちゃんに「電車なんだね」と声を掛けながら、Oちゃんの気持ち収まり体が緩むまでその場で過ごしました。気持ち収まったその後のOちゃんは、何事もなかったかのように、また自分のペースで好きな場所へ動いていったのですが……。

保育の中の葛藤というテーマを考え始めたとき、まず思い浮かんだのが、このOちゃんの姿と、そのときの私の思いでした。積み木を持つているF君に体全体で向かってしまうほどの思いがあふれる姿。そのときのOちゃん

からは、湧き上がる思いと、私に抱きかかえられることで無意識にこらえるけれど、涙があふれるほどの収められない何か葛藤しているような感じが、体の動きを通して伝わってきて、私の胸も痛みました。振り返ってみると、そこで感じた私の痛みは、Oちゃんを抑えるのと、思いを受け入れ、手を緩めてしまいうようになることと、私自身の中にも二つの思いの間の葛藤があつたのだろうと思います。

このエピソードのように、保育の中には、子どもの思いに触れながら、保育者自身が自分のかかわりを考えることも含めて葛藤しなければならぬことがあります。それは時に、保育の中の「選択」という言葉に置き換えられることにもなるのかもしれませんが、子どもの葛藤を感じ、支える場での保育者の葛藤は、かかわり方を選択していくための保育の営みとして重要なことなのだろうと思います。もう一つ別の視点から葛藤の場面を考えてみます。

小さい組の頃から知っている年長児のT君に出会くと、T君から「ぜんぜん来なかつたね。僕、待ってたのに」と言ってきました。時々保育参加をする私なので、「ごめんね、なかなか来られなかつたのよ」などとやりとりした後、T君と一緒に保育室へ行きました。T君は、段ボール箱で作られた物を運んでくると、「はい、これ」と言つて、私に紙のコインを渡してくれました。箱にある穴からコインを入れると、T君は、絵が描いてある小さな紙の入ったビニール袋を箱の後ろから出しました。「本当に出てきた」と私が喜ぶと、T君はにこつと笑つて、「もう一回やつてもいいよ」と言い、また紙のコインをくれました。私と同じようにコインを入れると、また袋が出てきました。このとき、このマシーン[?]は、今の私との遊び以外には広がっていきそうにないように思えたので、ちよつと考へて、「そうだ、もつと本物らしくしよう」とT君に投げかけ、景品のビニール袋に息を吹き込んで

パンパンに膨らませて、テープで角を留め、丸い透明のカプセルのようにして渡しました。T君は、うれしそうに「わあー、いいね」と応え、「いっぱい作ろう」と言いだしました。それから、T君が小さい紙に絵を描いて、私が入れたビニール袋を膨らませるといふ作業を始めました。そこへ友達のH君も来て、一緒に作つたり遊んだりするようになりました。このマシーンがもつと他の子どもとのやりとりに広がってほしいとも思いましたが、H君とかかわっているT君を見ると、今はこれでいいのかもしれないと考へました。その後、私は別のことでその場を離れなくてはならなくなり、結局そこには戻れず、次にT君に出会つたのは、遊戯室で他の友達と一緒に何かになりきつて遊んでいるときでした。T君は私を見かけると、「もう一緒に遊べなかつたじゃん」と言いましたが、笑顔で友達とかかわっている姿があつたので、私も「ごめんごめん、また今度ね」と返し、そのまま

T君を見送り、行き過ぎたのでした。

このときの私の中にも、ほんの少し葛藤がありました。T君とのかかわりの中で同じ次元で過ごしたいと思っている私と、保育者として、友達と一緒にしっかりと自分の時間を過ごしているT君の姿を大事に思う私と。

このように、保育の中では、それまで保育者の存在を頼りにしていたり、あるいは遊びを支える援助として必要としていたりしていた子どもが、やがて自身で動き始め、保育者が必要としなくなったとき、それを喜び、離れていくことを選択しなければならぬ保育者の心の中で起きる葛藤があります。保育の展開の場面について、津守真が「子どもにゆるる形での決断」と考察しているように、保育者が何かをやるのが絶対的な援助と思いついてしまふようになることがあります。子どもの自立と援助、指導に伴うこうした葛藤は、保育の営みと保育者の役割や援助を考え

る上で、保育者が常に向き合わなければならぬものだと思います。

改めて考えてみると、保育現場における「葛藤」は、本当にいろいろあります。二つのエピソードに限らず、保育の日々は、葛藤の連続です。その中身は、子ども自身の葛藤もあれば保育者の葛藤もあり、lightなものとheavyなもの、positiveなものとnegativeなもの、保育の場が生活であるからこそ触れざるを得ないさまざまな葛藤です。そしてそれは、子どもも保育者も思いを出し合い生活しているからこそ湧き上がるものだと思います。満たされる柔らかい時間と、葛藤に向き合う時間と、その日々の積み重ねの中に、それぞれの人として育つ場があるのが保育の現場なのだと思つて、向き合つていきたいと思つています。

参考文献

津守真『子ども学のはじまり』フレーベル館
一九七九年 pp. 56-63